

○研究あれこれ

新撰組と被差別部落

吉田 栄治郎

幕末の京都で活躍した新撰組を知らない人はいないだろう。先頃亡くなった司馬遼太郎氏の『燃えよ剣』は、近藤勇・土方歳三・沖田総司らを日本史上のスターの座に押し上げ、新撰組の名は三人の名とともに燦然と歴史のなかで輝いている。

ところで、奈良県内の被差別部落と新撰組との間に深いかかわりがあったといえ、あっても一向に不思議はないと思うのだが、これまでの部落史理解からすれば奇異に映り、そんなことがあるのだろうかという疑問を持つ向きもあるかもしれない。念のためどのようなかかわりがあったのか、紙数の許すかぎり紹介しておこう。なお、史料はすべて同和問題関係史料センター架蔵マイクロフィルムの旧添上郡H村文書によっている。

さて、慶応2(1866)年正月15日夜、「浪士体之者兩人、此内耆人者手槍を引提」て添上郡H村の庄屋宅に押し掛けるといふ出来事が起こった。庄屋が留守だったので、「浪士体之者」は用件も告げずに引き上げたが、翌々17日になって、今度は新撰組の名前で書状が届いた。残念なことに、書状そのものが残っていないので正確な文面はわからないが、一連の訴状を継ぎ合わせれば、およそ、

H村の枝郷である被差別部落N村の甚兵衛・又兵衛・甚次郎という百姓たちから、庄屋が村の算用を不正に行っているという訴えがあったので、取り調べたところ不正が明らかになったため、20日までに算用を元に戻さないと新撰組から重罪に処する。

というものであったらしい。

庄屋としては身に覚えのないことだとして、何とか「浪士体之者」にとりなしてほしいとH村の領主である興福寺大乘院や奈良奉行所に嘆願するのだが、大乘院も奈良奉行所も相手が新撰組と名乗っていることからどうやら及び腰になっていたようであり、事態は庄屋の期待どおりには進展しなかった。新撰組を名乗る二人の「浪士体之者」はH村周辺に居座り、いろいろ圧力をかけた様子があり、H村ではおおわらわで接待につとめている。

ところで、事件は2月なかばに「浪士体之者」が京都に引き上げたことでとりあえず落着した。庄屋の弁明がとおったようで、算用問題はN村甚兵衛らの思惑どおりにはならなかったらしい。しかし、甚兵衛の気持ちは治まらず、H村庄屋に対する不正糾弾はその後も続き、幕末～明治初年にH村とN村との間で起こったさまざまな紛争のみなもとになっていくのだが、それは別の機会に報告することとして

ここではふれない。

結局、正月15日の発端から2月16日の落着までの1ヶ月間にH村では、警固のため周辺村々から雇い入れた非人番の費用に銀107匁余り、「浪士体之者」や奈良奉行所役人、大乘院役人などの飲食接待費用などで銀420匁余り、郷宿への支払いなども合わせて銀5貫800匁余りの出費となったのである。

この事件の詳細はなお不明な点が多い。甚兵衛らが正しいのか、庄屋が正しいのか残された史料からは即断できない。また、「浪士体之者」兩人が本当に新撰組のものかどうかよくわからない点がある。しかし、はっきりと自らを新撰組のものだと名乗り、また、H村から直に京都の新撰組まで出した確認の書状について新撰組からとくにクレームがついていないことなどから見て、「浪士体之者」兩人を新撰組だとしてほぼ間違いのないところだろう。

だとすれば、N村甚兵衛らはどのようにして新撰組にコネクションをもったのか、N村から新撰組に入隊するものがいたのか、また、大和の一農村の紛争にわざわざ新撰組が出張したのはなぜかなど、今後の研究課題ではあるが、興味が尽きないところである。

残された史料から、部落史の裏面、別のいいかたをすれば「部落の生活史」ということになるのだろうが、そうした裏面に光をあてることによって、部落の歴史を貧困・低位や悲慘という側面からだけでなく、実にダイナミックなものとして描き出すことができるのではないだろうか。

(史料センター研究指導主事)